

居住形態の違いによる大学生のプライバシーに関する研究

—ルームシェアに注目して—

080108 増田 聡

0. はじめに

実家や一人暮らし、寮にルームシェアと現在の大学生の居住形態は多岐に渡るが、共同生活を行う人々は他人との距離をどのように保ち、どのように考えているのだろうか。多くの既存研究では各居住形態における行為を環境要因（個人的要因・社会的要因・物理的要因）から詳細に説明しているが、その結果居住形態での違いが見えにくいものとなっている。

本研究では、環境要因の影響を見ることのできる質問項目を異なる居住形態にも同一に行い、俯瞰的な視点で比較していくことで、ルームシェアにおけるプライバシーの実態の把握・分析を目的としている。

1. アンケート項目の作成

本研究では、プライバシーを「他人と接触するか、遮断するかの選択の自由の獲得」と規定する。

大学生のプライバシーを探索し、仮説設定の手掛かりとするために文献調査を行った結果、ルームシェアをする理由が、家賃・初期費用の安さという金銭的・設備的なメリットと、さびしくない・他の人の考え方に触れて刺激を受けてみたい・誰かがいることの安心感など、他人と一緒に過ごすことで得られる心理的なメリットに大別されることがわかった。このことから、「ルームシェアに住む者のプライバシーと他者を望む心理には関連性がある」と仮説を立て、親和動機測定尺度・プライベート空間機能尺度を用いることにした。（表3を参照）

2. 調査

2.1 調査参加者

調査参加者は32名。詳細は表1に示す。

2.2 調査時期

2009年11月15日～11月20日

2.3 調査の実施方法

個別自記入形式の質問紙調査で実施された。回答依頼時に、文書と口頭で説明合意を得ており、謝礼は提示していない。実施時間は約10分であった。

2.4 調査内容

本調査の質問紙の構成を表3に示す。質問紙は表2に示すように構成されていた。

表1 調査参加者の詳細

| 居住形態 | 一人暮らし | | 実家 | | ルームシェア | | 寮 | |
|------|-------|---|----|---|--------|---|---|---|
| | M | F | M | F | M | F | M | F |
| 性別 | M | F | M | F | M | F | M | F |
| N | 5 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 5 | 4 |

表2 質問紙の構成

| |
|--------------------------------|
| 1. フェイスシート |
| 2. 親和動機測定尺度 |
| 3. プライベート空間機能尺度 |
| 4. 各プライベート機能を確保する場所 |
| 5. 各プライベート機能をどのようにして確保するかの自由記述 |
| 6. 居住形態に対する意識 |

表3 質問紙の個々の項目

1. フェイスシート

大学・学年・性別・年齢・氏名の記入を求めた。

2. 親和動機測定尺度

親和動機とは他者と一緒にいたい、仲良くしたいという気持ちを指す(岡島1988)4種の下位尺度から成る
情緒的支持:辛いときにそばにいて欲しい気持ち
ポジティブな刺激:他者との接触によって得られる活気や楽しさ

社会的比較:自己評価のために比較対象として他者を求める気持ち

注目:自分の存在価値を認めてくれる人と一緒にいたいという気持ち。5件法で回答を求めた。

3. プライベート空間機能尺度

「社会的役割から離れて、他者の目を気にせず自由にふるまえる自分固有の領域(時間や空間)」を意味するプライベート空間をどの程度必要しており、確保しているかを測定する尺度。(泊・吉田(1998a; 1998b))

プライベート空間は3空間7機能、すなわち

(自分ひとりで)専有できる空間:緊張解消・自己内省・課題への集中

(気遣いのいらぬ人と)共有できる空間:率直なコミュニケーション

(他者への気兼ねが要らない)自己解放できる空間:気分転換・情緒的開放・自己変身

から構成されている。それらの機能は人の観点から見れば7つの欲求を意味し、生活空間(時間)の観点から見ればそれらの7つの欲求を充足させる生活空間の機能を指す。尺度得点が高いほど、人の観点から見れば各プライバシー空間機能に対する欲求の強さを持つ程度の高さが、生活空間の観点から見れば各プライバシー機能に対する欲求を充足させる生活空間の機能が低いことを示す。必要度は7件法、確保度は4件法で回答を求めた。

4. 各プライベート機能を確保する場所

7つのプライベート空間機能を「1. 家の中の個室(自分の部屋)」「2. 家の中の個室以外(風呂、キッチン、リビング、同居人の部屋など)」「3. 家の外」のうち、どこで確保しているのか尋ねた。

5. 各プライベート機能をどのようにして確保するかの自由記述

7つのプライベート空間機能をどのようにして確保しているのか、まず「一人で」か「誰かと」を選ばせようえで、具体的な行為を書くよう求めた。

6. 居住形態に対する意識

調査参加者の今までに経験してきた居住形態の種類や、次の居住形態の希望順や、現状の不満点などを尋ねる項目である。居住形態に関する調査参加者の考え方をより広く調べるために設けた。

3. 調査結果・考察

以降、各尺度の平均値を居住形態別の4グループ、居住形態*性別の8グループで比較する事で得られた結果を示す。なお、どの各尺度の平均値を性別の2グループで比較しても有意な差は得られなかったが、情熱的支持の項目で男子よりも女子の方が高い値を取るという有意な傾向が見られた。(P値=0.0540)

i) 親和動機測定尺度の結果

居住形態*性別による情熱的支持・注目に有意な結果が得られたが、居住形態別では有意な結果は得られなかった。

ii) プライベート空間機能の必要度の結果

どの居住形態においても、各プライベート空間機能を必要としており、特に、緊張解消・自己内省・率直なコミュニケーション・気分転換の機能がより必要とされている様子が見受けられた。

また、自己内省の機能に関しては、一人暮らしをする者は、ルームシェア・寮に住む者よりも必要とする程度が高く、率直なコミュニケーションの機能に関しては、一人暮らしをする者は、寮に住む者よりも必要とする程度が高い有意な結果を得られた(有意水準5%)。その詳細を図1に示す。

iii) プライベート空間機能の確保度の結果

どの居住形態においても、緊張解消・自己内省の機能は確保されているが、自己変身・気分転換・情緒的解放の機能は確保されていないという有意な結果が得られた(有意水準5%)。なお、得点が2点以上で、各機能が確保できているということを意味する。

また、課題への集中の機能に関しては、一人暮らしをする者だけが確保されている、率直なコミュニケーションの機能に関しては、ルームシェアをする者だけが確保されているという有意な結果を得られた(有意水準5%)。その結果を図2に示す。

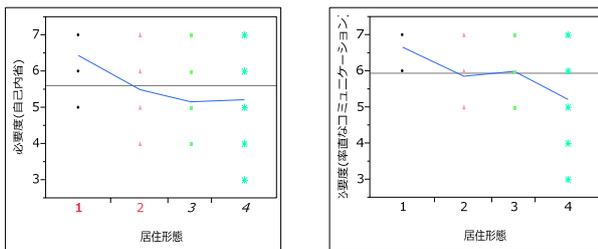


図1 居住形態による必要度の一元配置分析(平均値)

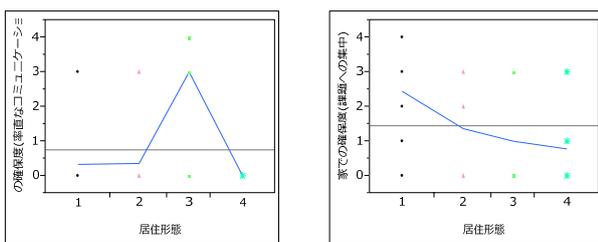


図2 居住形態による家での確保度の一元配置分析(平均値)

表4 有意な相関関係を持つ変数の組み合わせ

| 変数の組み合わせ | 全体 | ルームシェア |
|--------------------------------|----|--------|
| 必要度(率直なコミュニケーション)*情熱的支持(r=.38) | ○ | |
| 必要度(情緒的解放)*社会的比較(r=.43/ r=.83) | ○ | ○ |
| 必要度(自己変身)*社会的比較(r=.52) | ○ | |
| 必要度(自己内省)*ポジティブな刺激(r=-.83) | | ○ |
| 家での確保度(課題への集中)*注目(r=.43) | ○ | |
| 家での確保度(気分転換)*情熱的支持(r=-.97) | | ○ |

iv) 親和動機とプライベート空間機能の相関

居住形態全体と、ルームシェアをそれぞれ母体としたときに、各変数同士を多変量解析にかけ、親和動機とプライベート空間機能のペアで有意な相関が得られた結果を表4に示す。

この結果から、どの居住形態に住む者も、率直なコミュニケーションを求める気持ちが強いほど、辛い時に誰かにそばに居てほしい気持ちを表す情熱的支持が強くなり、情緒的解放を求める気持ちが強いほど、自己評価のために比較対象としての他者をもとめる社会的比較が強くなり、家で課題に集中できる者ほど、自分の存在価値を認めてくれる人と一緒にいたいという気持ちを表す注目が強くなるという事が読み取れる。

また、ルームシェアに住む者は、情緒的解放を望む者ほど、自己評価のために比較対象としての他者をもとめる社会的比較が強くなり、ポジティブな刺激をもとめる者ほど、自己内省を必要としておらず、家で気分転換を行う事が出来るものほど、情熱的支持をもとめる気持ちは小さいという事が読み取れる。さらに、図3に示すように、ルームシェアでは、率直なコミュニケーションが十分に確保されているが、それが必ずしも気分転換や情緒的解放につながっておらず、また課題への集中も確保できていないことが分かる。

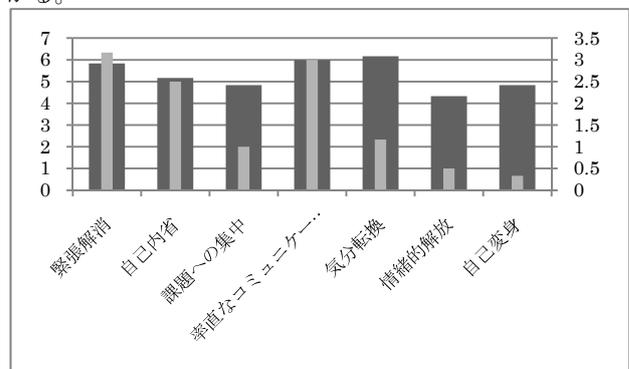


図3 ルームシェアにおける各プライベート空間機能尺度の必要度(背面)と家での確保度(前面)

4. まとめ

本研究では、現代の大学生の居住形態を4つに分けてプライベート空間機能を軸に親和動機との関連を含めて調査した結果、ルームシェアでは、率直なコミュニケーションが十分に確保されているが、それが必ずしも気分転換や情緒的解放につながっておらず、また課題への集中も確保できていないことが分かった。また、そうした特徴が、家で気分転換を行う事が出来るものほど、情熱的支持をもとめる気持ちは小さいといった、親和動機への影響を与えている可能性が示唆された。

今後の課題として、各居住形態のどのような要因が各プライベート空間機能を導くのかを、実験・調査を重ねることで検討する必要があるだろう。